

第十六回 三江口さんこうこうに周瑜火しゅうゆを縦はなつ、関雲長かんうんちやう義ぎもて曹操せうを積ゆるす

— 赤壁せきへきの戦いくさい —

(前回から今回まで)

東南の風が吹き出すと、周瑜は総攻撃を命じる一方、諸葛亮を殺そうと兵を差し向けます。しかし、諸葛亮はこのことを見越みこして、すでに立ち去ったあとでした。諸葛亮は、周瑜の追つ手を振り切り、趙雲に守られて劉備のもとへ戻ります。

夏口かこうの劉備のもとに戻った諸葛亮は、曹操の敗北を見越して、趙雲、張飛、劉琦りゅうきの諸將に、それぞれ敗走する曹操軍を打ち取るよう指示をだします。しかし諸葛亮は、関羽には指示を与えず無視します。

「いったい、どういうことか」と詰め寄る関羽に対し、諸葛亮は、関羽がかつて曹操に恩義を受けたので、出会ったら見逃すだろうといっています。

これに対し、関羽は、命にかけても絶対に見逃さないと誓約します。ここで諸葛亮は、あらためて関羽に、華容道かようどうで曹操を待ち伏せるよう指示します。劉備も、義に厚い関羽が曹操を見逃すのではないかと心配します。

諸葛亮は劉備に、天文を観察したところ曹操はまだ滅亡するには至っていないので、関羽に情義をかけさせる機会を与えたのだといいます。これは、次の名場面「関雲長、義もて曹操を釈す」の伏線になります。

(本文抄)

さて、曹操は本陣のなかで諸将と軍議をしながら、ひたすら黄蓋からの連絡を待っています。東南の風がますますはげしく吹きはじめたため、程昱が曹操に言うには、「東南の風がはげしくなってきましたから、油断してはいけません」

曹操は笑いながら言った。

「冬至は『一陽来復（陰が極まり陽が生ずること）』の時節だ。東南の風が吹くのは当たり前ではないか」

そのとき、兵士から報告があり、江東から一隻の船が到着し、黄蓋の密書を持って来たとのことであった。曹操が急いで呼び入れると、その使者は一通の手紙を差し出した。その文面は以下のとおり。

「周瑜の監視が厳しく、脱出する機会がなかったが、このたび鄱陽湖から兵糧が運び込まれ、

私が巡視の役を命じられましたので、脱出の目途がたちました。必ず江東の名ある大将の首をとって、降伏します。今晚二更（午後九時から午後十一時の間）、青龍の旗を立てた船が、兵糧運搬船ですから、間違いなきよう」

曹操は大いに喜び、諸将とともに水軍の大きな船に乗り込み、黄蓋の船の到着を待ち受けることにした。

黄蓋は三隻目の火船に乗りこみ、胸当てをつけただけで、白刃を手にし、その旗には「先鋒黄蓋」と大きな字で書かれていた。黄蓋が追い風に乘って赤壁へ漕ぎだすと、東風がますます強くなり、水面ははげしく波立った。

曹操が水上の本陣にあつて、長江を見渡していると、皎々たる月影が水面に照り映え、まるで無数の金色の蛇が波と戯れているようだった。曹操は吹きつける風をまともに浴びて、わが事なれりとばかりからからと笑った。

と、一人の兵士が指さして言った。

「追い風に帆をあげた船団が、こちらにやってくる様子です」  
曹操は櫓に登って眺めていると、また報せがあつた。

「どの船も青龍の旗をあげておりますが、そのうち大きな旗に『先鋒黄蓋』と大書していま

す」

曹操は笑いながら言った。

「公覆こうかく（黄蓋の字）が降伏して来たのだ。これぞ天の助けだ」

船はだんだん近づいて来た。これをじっと眺めていた程昱ていいくは、曹操に言った。

「近づいて来る船は敵の計略です。本陣に近づけてはなりません」

「どうしてそれがわかる」と曹操。

「兵糧を積み込んでいるなら、船足は重いはずです。しかし、近づいて来る船を見ると、軽々と浮いています。しかも、このはげしい東南の風。もし、敵の計略であれば、どうなさいますか」と程昱。

曹操ははっと気がついて言った。

「誰か、あの船を止めよ」

「私は水に慣れておりますから、行かせてください」と文聘ぶんぺい。

と言うなり、文聘は小船に跳とび乗り味方に手で指図すると、十数隻の船が文聘につづいた。文聘は舳先に立って、大声で叫んだ。

「丞相のご命令だ。南軍の船は本陣に近寄るな、ひとまずそこで停れ」

兵士たちも声を揃えて、「はやく帆を下ろせ」と怒鳴った。

その声も終わらないうちに、弦のうなる音が響いたかと思うと、文聘の左肩のつけ根に矢が命中し、ぼったり船内に倒れ込んだ。船上は大混乱に陥り、兵士たちは先を争って逃げもどった。

南軍の船団は曹操の本陣の二里手前まで近づいたが、このとき黄蓋が刀をひと振りすると、前方の船がいつせいに火を吹き出した。火は風の勢いに乗り、風は火の勢いを強めて、船は矢のように突進し、その炎と煙は天を焦がさんばかりだった。

こうして二十隻の火船が曹操の水軍の陣へ突入し、船という船にあつというまに火がつき、曹操方の船は鉄の鎖で繋がれているために逃げるに逃げられない。そこへ向こう岸から石火矢いしびやが鳴り響いたかと思うと、四方から火のかたまりとなった船が殺到し、長江の一面に火が強風に煽られて広がり、紅蓮ぐれんの炎に包まれ、天も地も真っ赤になった。

曹操はふりかえって陸上の陣営を眺めると、あちらこちらから火の手があがっている。

黄蓋は小船に跳び移り、数人の者に櫓を動かさせて、炎と煙の中をかいぐぐって、曹操の姿を捜し求めている。曹操がもはやこれまでと、岸に向かって跳び移ろうとしたとき、張遼ちやうりやうが小舟を漕ぎよせて曹操を乗り込ませたが、このときすでに、曹操の大船には火が回っ

た。張遼は十数人の兵士とともに曹操を守りながら、岸边に向かつて飛ぶように船を走らせた。

黄蓋は紅い戦袍せんぽうを着た者がその船に乗り込んだのを見て、あれぞ曹操にちがいないと、船足ふなあしを速めて突進し、白刃はくじんを手に声を張り上げて叫んだ。

「曹操、逃げるな。黄蓋ここにあり」

曹操は思わず悲鳴をあげた。

そのとき、張遼は弓に矢をつがえ、黄蓋が接近したのを見すまして、ひゅつと放った。

このときちょうど風の音はげしく、火炎のなかにいた黄蓋には、弦のうなる音が聞こえるはずもなく、肩先に矢が命中し、もんどり打って水中に転がり落ちた。

韓当は煙や火をかくぐつて、曹操の水軍の陣地に突き進んでいたが、兵士が飛んできて、「うしろの舵かじにすがって、誰かが將軍のお名前を叫んでおります」と言った。

韓当が耳をすませると、「義公ぎこう（韓当の字）、助けてくれ」と叫ぶ声が聞こえる。

韓当は「黄公覆こうこうふく（黄蓋の字）だ」と、急いで船に助けあげると、黄蓋の肩先に矢が突き刺さっている。

矢竹やたけは抜き出したが、矢じりは肉のなかに埋まったままだ。韓当は急いで濡れた上衣をぬがせ、

刀で矢じりをえぐりだすと、旗を引き裂いて傷口を縛り、自分の戦袍をぬいで黄蓋に着せた。かくして黄蓋を別の船に乗せ、本陣に返して傷の手当をさせたのだった。

黄蓋はもともと水練すいれんに通じていたので、厳寒のさなかに鎧を着たまま水中に転落しながら、死を免れることができたのである。

さて、この日、長江の水面は猛火に包まれ、関とぎの音が地をどよもすなかを、火は兵に応じ、兵は火の威力に乗じるところ。これぞまさしく「三江の水戦、赤壁の塵兵ちんべい（みなごろし）」という具合だった。

鎗で突かれた者、矢に当たった者、火に焼かれた者、水に溺れた者等々、曹操軍の死者は数えきれなかった。

#### （解説）

「赤壁の戦い」の様子は、『三国志』の「周瑜伝」「黄蓋伝」の注に多く書かれています。

二〇八年十二月、黄蓋が軽快な十艘そうの船に枯草や芝を積みこみ、兵士たちに「黄蓋が降伏する」と叫ばせて曹操軍に近づきます。曹操軍まで数百メートルに迫ったとき、船に火をかけます。折おりからの東南の風につて、火の玉となった船団が、次々に曹操軍に突入します。

曹操軍の船はたちまち燃え上がり、東南の風に煽あおられて陸の陣営にまで燃え移ります。そこへ、周瑜と劉備の軍勢がどっと襲いかかり、曹操軍は総崩れとなって敗走しました。

周瑜の呉軍はわずか二万、対する曹操軍は公称八十万。数の上での劣勢を覆くつがえす、奇跡的な勝利でした。この戦いの主役は、なんといつても呉の周瑜です。天下統一を目前にした曹操に、必殺パンチをくらわせました。

また、孫権を説き伏せるために呉に赴き、劉備と孫権の同盟を実現させた諸葛亮の活躍も、主役級といえるでしょう。彼の時勢を察する見識と雄弁がなければ、同盟は成立しませんでした。

この史実を土台に、『三国志演義』はさまざまなフィクションを使って、この劇的な勝利を盛り上げます。しかし、百戦錬磨の曹操が、圧倒的な兵力をもっていながら勝てなかったのは不思議なことです。

じつは、『三国志』には、曹操軍に疫病えきびょうが流行はやったと書かれています。

武帝紀には、公かんり(曹操)は赤壁に到着し、劉備と戦うが、不利だった。疫病が流行して、官吏士卒の多数が亡くなったので、撤退した」

周瑾伝には、「(周瑜は)赤壁において曹公の軍を劉備の軍と共に逆撃した。この際、軍に



は疫病が流行っていたため、一戦を交えたと敗走し、長江北岸へ引き上げた」

先主伝には、「先主（劉備）は孫権の派遣した周瑜・程普ていふらの水軍数万と力を合わせ、赤壁で曹公を大いに破り、その船を焼いた。先主は、呉軍と共に水陸並進、追撃して南郡なんぐんにいたり、曹公は、疾病しつぺいによる死者も多いため帰還した」

周瑜も、孫権に徹底抗戦を主張した時、北方の人間はこのあたりの風土に慣れていないので、病人が続出するのは目にみえていると言っています。

曹操軍は疫病で倒れるものが続出し、戦う前からかなり兵力が損耗そんこうしていたのです。そこへ呉の水軍が火攻めで襲いかかったので、ひとたまりもなかったのでしょう。このあたりが「赤壁の戦い」の真実だったと思います。しかし、曹操が敗退して引き上げたのは事実です。このとき曹操は五十四歳。

初老の域に入った曹操にとって、あと一步で天下平定というチャンスを逃した、手痛い敗北でした。「赤壁の戦い」を機に、時代は「三国鼎立ていりつ」の方向に動いていきます。

周瑜は三十四歳、孫権は二十七歳、諸葛亮は二十八歳です。青年世代の熱と力が、初老の英雄曹操を打ち破ったのです。

周瑜と劉備軍の追撃を逃れた曹操は、赤壁対岸の烏林うりんから華容道かようどうを通過して、江陵こうりょうへ落ちのびようとしています。

『三国志』武帝紀に引く注（「山陽公戴記」さんようこうたいき）は、この行軍が困難をきわめたことを、次のように書いています。

泥濘ぬかるみにぶつかり道は通れず、折から大風が吹いた。弱兵（力の弱い兵士）全員に草を背負わせて、ぬかる道を埋めさせ、その上を騎兵がや々と通ることができた。弱兵は人や馬に踏みつけられて、泥の中に落ち込み、非常に多くの死者を出した。どうにか難所を抜けると、曹操はたいへん喜んだ。諸将がわけを聞くと、「劉備はわしと同等だが、ただ頭のめぐりが悪い。先回りして火をかけられたら、全滅するところだった」といいます。追ってきた劉備が火を放ったときには、すでに曹操は逃げ去ったあとだった。

目を覆うような惨状でも、めげずに大きな口をたたく曹操です。大きな口といいましたが、「良言の一句は三冬さんとうを暖かくす（良言一句三冬暖）」ということわざがあります。良言は冬でも暖かく感じさせるという意味ですが、曹操は、ここぞというときに発する言葉の力を知っていたのでしよう。曹操は困難にでくわした時に、前向きな言葉を、みんなの前でよく口にします。

かつて、曹操が弱いと侮あなどった張繡ちやうしゆうに大敗を喫したとき、「諸君、見ていてくれ。わたしは同じ負け方を二度とせんから」と、敗軍の將兵に宣言しています（『三国志』武帝紀）。

これは史実の曹操ですが、負けても、「よし、やろう」という生命のみずみずしさを感じさせます。曹操の姿を、見るものはさぞかし頼もしく眺ながめたことでしょう。

ともかくも、こうして多くの犠牲を出しながら、曹操は江陵かうりやうをめざします。

ついで、『三国志演義』は、曹操と因縁いんねん浅あからぬ関羽を登場させ、いやがうえにも話を盛り上げます。

曹操は、諸葛亮が退路を断つべく配置した趙雲、張飛の追撃をうけますが、かろうじて逃げ切り、華容道かうりやうにさしかかります。そして、疲労の極に達した曹操の前に、関羽が立ちふさがります。

#### （本文抄）

人も馬も、その三分の一は落伍らくこし、三分の一はくぼみに埋まり、一部の者だけが曹操のあとにつき従った。険しい山道を越え、道がやや平坦になったので、曹操がふりかえって見ると、つき従っているのはわずか三百騎余り、それも満足な装束しょうぞくや鎧よろいを身につけた者は一人

もない。

曹操が先を急ぐように言うと、諸将が言うには、「馬はことごとく疲れはてております。しばらく休息いたしましょう」

曹操は言った。

「荊州に到着したら休息させるから、我慢せよ」

そう言つて、さらに数里も行かないうち、曹操は鞭をあげてからからと笑つた。

諸将はたずねた。

「丞相、何をまたそんなに大笑いをなさるのか」

曹操は言つた。

「人はみな周瑜と諸葛亮の知謀をいうが、わしの見るところでは、けつきよく無能な者どもだ。もしここに一隊の軍勢をひそませておけば、われらはみな手を束ねて捕らえられただらう」

と、その言葉も終わらないうちに、石火矢いしびやの砲声が鳴り響き、両側から五百の兵士が現れた。大将の関羽が先頭に立って、青龍刀をひっさげ、赤兔馬せきとうばに跨またがつて、行く手をさえぎつた。曹操軍はこれを見て肝をつぶし、ただ顔を見合わせるばかり。

「ここまで来れば、一か八か、死にもの狂いでぶつかるしかない」と曹操。

「我らも怯みはしませんひるが、馬がもはや役に立たなくなっておりますので、これ以上戦うことはできません」と大將たち。

そのとき、程昱は言った。

「私は、雲長をよく知っております。彼は上の者には強く、下の者には憐み深く、強きを挫くじいて弱きを扶たすけ、恩義を忘れず、仁義の志の厚い人物です。丞相は以前、彼に恩義をかけておられます。今、それを仰おほせになりましたなら、この難のがを脱のがれることができるかと思いません」

曹操はうなずき、ただちに馬を前に進め、雲長に会え積しやくして言った。

「將軍には、その後、お変わりはないか」

関羽も会積を返して言った。

「私はこのたび軍師（諸葛亮を指す）の命を受け、久しく丞相をお待ちしておりました」

「わしはこのたびの戦いに敗れて兵を失い、このような危機に陥ったが、どうか將軍には昔の情義に免じて、この場をお見逃しいただきたい」と曹操。

「いかにも昔、私は丞相より厚恩をこうむりましたが、すでに顔良・文醜がんにりょう ぶんしゆう（いずれも

袁紹配下の猛將<sup>えんしょう</sup>を討ち取り、白馬<sup>はくば</sup>での危機をお救いしたことで、ご恩をお返しをさせていただきました。今日は、私情は許されません」と関羽。

「あなたが、五関の守将を斬ったときのことを覚えておられるか。大丈夫たるものは信義を重んじるもの。『春秋』に深く通じておられるあなたのことだから、庾公之斯<sup>ゆこうしし</sup>が子濯孺子<sup>したくじゆし</sup>を追った時のことを、ご存じでしょう」と曹操。

関羽は義を山のように重んじる人であったから、かつて曹操から受けた幾多の恩義、さらに、五関の守将を斬った時、曹操が咎<sup>とが</sup>めなかつたことを思い起こして、心を動かさぬはずがない。

その上、曹操の軍勢が恐れおののき、みな涙を浮かべているのを見ると、ますます惻隱<sup>そくいん</sup>の情を禁じ得なかつた。そこで関羽は馬首を返すと、「散らばれ」と配下の兵士に命じた。

これは、言うまでもなく曹操を見逃<sup>みのが</sup>そうという心からだ。

曹操は関羽が馬を返したのを見ると、すぐさま部将たちとともに一斉に駆け抜けた。

関羽が再びふりむいた時には、曹操らの姿はなかつた。

関羽が大喝一声すると、曹操の将兵はみな馬から下り、泣き泣き地にひれ伏したので、関羽はますます憐れを覚えた。ためらったちようどそのとき、張遼<sup>ちようりよう</sup>が馬を飛ばして駆けつけ

て来た。

それを見るや、関羽はまた旧き友ふるへの情がわいてきて、長いため息をつき、とうとう全員を許して立ち去らせた。

(解説)

○曹操、関羽、張遼の「義と情」

『三国志演義』は曹操と関羽、そして二人をつなぐ張遼の交流を、フィクションをまじえて随所に描きます。

曹操と関羽の最初の出会いは、この第三回の解説でふれた「温酒斬華雄」の場面です。

諸侯連合軍は、董卓の猛将華雄かゆうに次々と部将を打ち取られ、誰もかなうものがない。その時、私が華雄の首を献じましょうと関羽が名乗り出る。名門出身の袁術えんじゆつは、関羽の肩書ふうぼうが位の低い「馬弓手ばきゆうしゅ」と聞いて馬鹿にする。そこへ、曹操が割って入り、この男の風貌ふうぼうはたものでありません、やらせてみましょう、と。曹操は温かい酒を勧めますが、関羽は戻ってからいただきましょう、と。そして華雄の首をうちとて帰ってくると、まだ酒は温かいまま。肩書で人を見る袁術と、仕事ぶりで見ようとする曹操が対比して描かれます。

ついで、第五回の「関公、三事を約す」です。

劉備の二夫人を守って曹操に降伏した関羽。その際、張遼ちやうりようが関羽のもとに赴き、降伏するよう説得します。また、曹操に、関羽の出した三条件をのむよう説得したのも張遼です。

関羽と張遼の出会いには、もと呂布の部下であった張遼が、呂布とともに曹操に捕らえられたとき、関羽が必死に命乞いいのちごいをして張遼を救います。その後、張遼は曹操の麾下きかに入り、曹操軍きつての猛将として活躍するようになります。

「関公、三事を約す」では、関羽のために、張遼が、曹操と関羽の間にたつて橋渡しをしました。『三国志』関羽伝には、「張遼は関羽を兄弟と呼び、親交があつた」と書かれていて、その記述がもとになっています。

曹操は関羽の心をつかもうと、厚遇のかぎりをつくしますが、劉備一筋の関羽の気持ちを変えることができません。そして、曹操は、関羽が劉備のもとに行くことを許します。その際、曹操は関羽と親交のあつた張遼に、関羽の気持ちきもちをそれとなく問わせています。

関羽が退去するとき、張遼は曹操の命をうけて関羽を追いかけ、途中でとどまらせて共に関羽を見送っています。また、関羽が通行手形つうこうてがたをもたずに五つの関所を突破したとき、曹操



からの許可状を届けにいったのも張遼です。

そして今回の場面では、関羽は、曹操と張遼を見ると昔年の情がこみ上げ、どちらも見逃してやります。関羽は葛藤かつとうのすえに、曹操と張遼への義を貫いたのです。自分の命よりも「信義」を重んじる、ひときわすぐれた関羽の風格を描き出します。

(本文抄)

さて、関羽は曹操を見逃したあと、軍勢を率いてもどつてきた。

このとき、各方面に出ている軍勢はいずれも馬・武器・兵糧ぶんどを分捕いきようようつて意気揚々ともどつていたが、関羽だけはただの一人の兵も一頭の馬も捕らえず、むなしく帰つてきた。

諸葛亮はちょうど劉備とともに祝賀の宴をしていたが、関羽が来たと知らせがあつたので、急いで席を立ち、盃を手に出迎えて言った。

「これは將軍、このたびは大いなる功績を立てられ、天下のために大きな害毒を除かれたことを喜ばしく思います。城外までお出迎えして祝うべきところ、失礼いたしました」

だが関羽は、何も言わない。

諸葛亮は「將軍、われらが途中まで出迎えなかつたので、気を悪くしておられるのかな」

と言ひ、また左右の者を顧みて言うことには、「おまえたち、どうして早く知らせなかつたのか」

すると、関羽は言った。

「お詫びのため、この命をさし出そうと覚悟してまいりました」

「曹操は華容道へ来なかつたのですか」と諸葛亮。

「いや、確かに来ましたが、私はとり逃してしまつたのです」と関羽。

「では、敵の大將は捕えられたのかな」と諸葛亮。

「一人も捕えておりません」と関羽。

「さては、曹操の昔の恩義を思い、わざと見逃がされたのだな。誓約書がここにある上は、軍法による処罰は免れませんぞ」というなり諸葛亮は、引き出して首を打てと命じた。

さて、諸葛亮が関羽を斬ろうとしたとき、劉備は言った。

「昔、われら三人（劉備・関羽・張飛）は義兄弟の契りを結んだとき、生死をともにしようと思ひました。今、雲長は軍法に違反したのは確かですが、彼が死んでは、張飛も私も生きてもおられません。それゆえしばらく預かりとし、後日の手柄をもつて罪をうめあわせることにしてもらえないか」

諸葛亮はそこではじめて許したのだった。

(解説)

前回、諸葛亮は、天文を観察すると曹操はまだ滅亡する時ではないから、わざと関羽に情義を施す機会をあたえたのだと劉備に言いました。ですから、関羽が曹操を見逃すことを劉備も承知していたのです。にもかかわらず、このとき諸葛亮は、関羽の首を打てと命じたのです。

魯迅は、『中国小説史略』でこの場面について、「この叙述は孔明については狡猾さを示しているだけだが、関羽の気概は凜然たるものがあり」と指摘しています。

たしかにこの場面の諸葛亮は、狡猾な印象を受けます。しかし、こうは考えられないでしょう。か。

諸葛亮は、劉備が関羽の命乞いをすることを承知のうえで、「首を斬れ」と強い口調で命じます。それを見て周りは慄然としますが、そのとき阿吽の呼吸で、劉備が関羽の命乞いをします。そして、諸葛亮が関羽を許すという段取りです。

これは、一つには関羽に曹操に対する義を果たさせ、また一つには、劉備主従の絆の強

さを喧伝けんでんする効果があります。このあと、劉備集団が荊州に地盤を築いていくうえで、人心をつかむことは不可欠な要素です。ですから、諸葛亮は人心をつかむため、あえてこのような行為をしたと解釈したほうがいいでしょう。これを狡猾と言ってしまったええそれまでですが、でも、この名場面はフィクションです。念のため。

劉備が頭を下げ諸葛亮がこれを許すという、まるで主客逆転しゅきやくてんのような場面ですが、劉備が諸葛亮に全幅ぜんぷくの信頼を与えていたということでもあります。

『三国志』諸葛亮伝の注に引く「袁子えんし」に、次のような記述があります。

呉の張昭ちやうしやうは、諸葛亮に呉に留まり孫権に仕えるよう薦めすすめますが、諸葛亮は、孫権は人主じんしゅの器うつわといつていいでしょう。しかし、私の才能は認めることはできても、私の才能を充分發揮させることはできないでしょう、と答えたと書いています。

裏を返すと、劉備は諸葛亮にすべて委任いにんし、その才能を思う存分發揮させたということですよ。